Why should Japanese university students study academic English?

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉村, 富美子 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/25035

なぜアカデミックイングリッシュを学ぶべきなのか　講義要旨

吉　村　富美子

本講義では、アカデミックイングリッシュ（academic English）の歴史を紐解きながら、なぜ日本人大学生がアカデミックイングリッシュを学ぶべきなのかについて説明した。なぜアカデミックイングリッシュを学ぶべきかを一言でいえば、重要な情報へのアクセスに必要だからである。インターネットが発達し物理的には文書へのアクセスが容易になった今こそ、アカデミックイングリッシュの読み書きができるかどうかで情報へのアクセスに差が出る。また、大学生ともなれば、その発達段階に相応しい洗練された表現ができることが期待される。その期待に応えるためにもアカデミックイングリッシュを学ぶべきで、そのためにアカデミックイングリッシュの特徴やその特徴を創り出している言語的要因について学ぶことが助けとなる。

ここでは、講義内容の要旨をかいつまんで紹介するが、本講義の詳しい内容は、2022 年に出版された『東北学院大学論集（英語英文学）105 号』に掲載した「なぜアカデミックイングリッシュを学ぶべきなのか」と本論集（『東北学院大学論集（英語英文学）106 号』）に掲載した「アカデミックイングリッシュの学習法」を参照してほしい。

アカデミックイングリッシュの特徴

アカデミックイングリッシュの主な特徴として、情報の凝縮（density）、

抽象度の高さ（abstractness）、無機質性（impersonal tone）などが挙げられるが、これらの特徴は言語的には主に「文法メタファー」（grammatical metaphor）、特に「名詞化」（nominalization）によってもたらされるとHalliday（2004）は言う。

Halliday（2004）は、言語は層状になっていて（stratification）（p. 53）、意味と文法は分離（decoupling）したり、組み合わせを変えたり（recoupling）することができると言う（p. 94）。どういうことかというと、話し言葉では物の名前は名詞で、動作は動詞で、様子は形容詞を使って表すが、文法メタファー化した書き言葉の英文では、同じ意味を表すのに異なる文法を用いる。例えば、動作を表すために動詞ではなく名詞を用いたり、様子を表すために形容詞ではなく名詞を用いたり、情報の因果関係を表すために接続詞ではなく動詞を用いたりする。

そして、文法メタファーの中でも最も使用頻度が高く重要なものが名詞化である。下の1から5までの英文を見てみると、意味と表現が合致している（congruent）1の文から、名詞化が繰り返されることによって、4や5のように表す意味とその意味を表す文法の間に乖離のある書き方に変わっていっている。名詞化は情報の凝縮（packing）[1]にも貢献する。名詞化することで節（clause）[2]を名詞グループ（nominal group）[3]にまとめることができ、2つの情報を1つの節で表現することが可能になるのだ。

1　凝縮する（packing）とは、専門用語や抽象的な表現を使ったり節を名詞化したりして、内容をより簡潔にまとめることである。
2　節（clause）とは、主語と動詞を含む一文の中の意味のまとまりのことである。
3　名詞グループ（nominal group）とは、名詞を核とする意味のまとまりのことである。Halliday（2004）は、「グループ」（a group）という用語を、「伸長した単語」（an extended word）という意味で使っていて、名詞グループにおいては、前置修飾語や後置修飾語によって名詞が伸長される。（p. 61）

意味と表現が合致

1. Glass cracks more quickly the harder you press on it.
   動詞　動詞
2. Cracks in glass grow faster the more pressure is put on.
   名詞　動詞　名詞
3. Glass crack growth is faster if greater stress is applied.
   名詞　副詞　形容詞
4. The rate of glass crack growth depends on the magnitude of the applied stress.
   名詞　名詞
5. Glass crack growth rate is associated with applied stress magnitude.
   名詞　名詞

最も比喩的

（Halliday, 2004, p. 34 より）

アカデミックイングリッシュの歴史

アカデミックイングリッシュの歴史は、理系の英語（the language of science）の歴史を概観することで見えてくる（e.g., Halliday, 2004 ; Halliday & Martin, 1993）。Halliday（2004）は、「科学の進歩は科学的思考の進歩であり、科学的思考は言葉を使ってなされてきた」（p. 212）と述べる。動詞や形容詞を名詞化して抽象概念や専門用語を鋳造することはギリシャ時代から行われていたが、文法メタファーを最も効果的に使い、後世に大きな影響を与えたのはニュートンであると言う。ニュートンの功績は、まず現在まで続く実証研究の方法を確立したことである。その方法とは、実験を用いて、数学の助けを借りながらそこから論理的に導き出される一般原則を提示し、さらにその一般原則を実験によって検証するという方法である。そして、このようにして発見した新しい知識を記述するのに適した表現形式として名詞化表現を用いたのだ（Halliday, 2004, p. 147）。ニュー

トンが新しい科学知識を記述するために用いた名詞化表現は、その後、物理学論文の主要な書き方となっていき、19 世紀には生物学論文へ 20 世紀には社会学論文へと広まっていく（Halliday, 2004, pp. 217-218）。学術論文において始まった文法メタファー化は、さらに、一般向けの科学記事や新聞記事へと広まり（Biber & Gray, 2010）、現在の社会では教養のある大人が書く英文の主要な特徴となっている。

人の発達と言語発達

Halliday（2004）は、人の発達と言語力の成長を次のように説明している。まず、人は話し言葉を習得する。小学校にあがると文字を学ぶが、この頃はまだ話し言葉を文字を使って書きつけただけで、動作には動詞を使い、物には名詞を使い、様子には形容詞を使って表すといったように、言葉が表す内容と文法は一致している（congruent）。しかし、中学生に入ると、アカデミックイングリッシュを用いた書き方が教科書の主要な書き方となり、生徒たちも徐々に教育で得た知識をアカデミックイングリッシュを用いて表現するようになると言う。例えば、Halliday（2004）は、上記の Grass cracks…の 1〜5 の英文の使用年齢を、各々、6 歳、9 歳、12 歳、16 歳、20 歳と説明している（p. 113）。このように、年齢が上がるにつれて、文法メタファーを使った文章の読み書き力を身につけることが期待されているのである。

文法メタファー化されると、少ない節（clause）の中に情報が凝縮されるため一度に処理する情報量が多くなることに加えて、名詞グループの中の情報の関連性が暗示的にしか示されなくなるため、一般に読みにくくなる。そこで、大学生や大学院生にはアカデミックイングリッシュを用いて書かれている英文が具体的にどのような意味を表すのかを自分の言葉で説

明できることが求められる。

このように、人は成長するにつれて徐々に話し言葉から書き言葉に移行していく。それは、物理的に口を使うか文字を使うかという変化だけを言うのではない。意味と文法が一致した話し言葉的な表現から意味と文法が異なる文法メタファー化した表現に移行するという意味も含んでいるのだ（Halliday, 1989）。

なぜアカデミックイングリッシュを学ぶべきなのか

では、日本人の大学生がなぜアカデミックイングリッシュ、特に文法メタファーを学ぶべきなのだろうか。その主な目的は次の３つである。一つ目は大学で出合う英文を理解するため、二つ目は専門科目の内容や学校で教える各教科を理解するため、三つ目は大学生という発達段階に相応しい英文の読み書きができるようになるためである。

まず、大学で出合う英文を理解したことを示すためには、それを自分の言葉で説明できなければいけないが、「文法メタファー」や「名詞化」という概念を知っておくと、抽象的に表現されている英文を展開（unpacking）[4] してより具体的に説明することができるようになる。また、情報検索の際に用いる文献のタイトル、要旨、各セクションの見出しにおいては文法メタファーの一種の名詞化表現が多用される傾向にあり、名詞化表現の理解ができなければ情報検索においても支障が出る。次に、大学の専門科目や小学校、中学校、高校の各教科における文法メタファーの使い方は、その科目や教科独自の特徴があり、その特徴を知ることで内容理

4　展開する（unpacking）とは、抽象的な表現を具体的な表現を使って説明したり、名詞化された表現を元の動詞や形容詞に戻して言い換えたりしながら、内容をより分かり易く説明することである。

解の補助となりうる。例えば、理科は、専門用語を創りながら日常の現象を科学的な視点で説明しようとする（Halliday, 2004 ; Halliday & Martin, 1993）。一方、歴史においては、節によって出来事を説明した後で、その情報を名詞化し、次の節の主題（the theme）となし、論述（the rheme）の部分でそれにコメントを加えることで、出来事の間の因果関係を説明しようとする（de Oliveira, 2010）。このような各科目や教科固有の特徴を学ぶことで、各学問分野の内容の理解が促進される。アカデミックイングリッシュを学ぶもう一つの理由である教養のある社会人の一人として認められるためとはどういうことかと言うと、現代社会では教育を受けることによって人は知識を蓄積し、その分野の文献や教科書を通して文章表現も学んでいく。現代においては大人が書く英文にはかなり文法メタファーや名詞化表現が用いられている（Halliday & Martin, 1993, p. 15）ので、教養を身につけ一人前の大人として認められるためには名詞化表現に代表されるアカデミックイングリッシュを用いて英文が書けるようにならなければならない。

アカデミックイングリッシュの学習法

アカデミックイングリッシュは、英語のネイティブスピーカーにとっても難解で、意識的な学習が必要であるため、その特徴や学習法については大学や大学図書館、大学のライティングセンターなどがホームページ上で情報提供を行っている（e.g., Cooper, 2010 ; Gillett, 2022 ; Hitchcock, 2010）。また、その特徴や教育への応用についてのさまざまな本や論文も出されている（e.g., Cameron, 2011 ; Fang & Schleppegrell, 2010 ; Halliday, 1989, 2004 ; Rose & Martin, 2012 ; Schleppegrell, 2004 ; Unsworth, 1999）。講義では、これらを参考にして効果の見込まれる学習法をいくつか紹介し

た。

具体的には、1）スラッシュリーディング、2）接頭辞や接尾辞等の接辞の学習、3）非名詞化・名詞化の言いかえ練習、4）節を名詞化してTheme-Rheme構造の中の主題として使う方法の学習、5）各研究分野や各教科における代表的な文法メタファーの使用の学習などが挙げられる。まず、学術英文は一文が長く複雑であるため、意味のまとまりで区切りを入れることで、一度に処理する情報量が少なくなり理解しやすくなる。学術英語は、単語の複雑さにおいても知られる。学術英語の多くは、ギリシャ語やラテン語由来の接辞の組み合わせになっている。そこで、代表的な接頭辞や接尾辞の意味や役割を学ぶことは、単語を分析するための道具となる。次に、非名詞化・名詞化の言いかえ練習は名詞化のメカニズムを理解するために有益である。非名詞化によって、元の動詞や形容詞に戻し、それに主語や目的語などを復元するという作業を通して、英文をより具体的に理解する手助けになる。名詞化への言いかえを学ぶことは、名詞化のメカニズムの理解に貢献するだけでなく、表現のバリエーションを広げ、さまざまな言いかえを可能にする。さらに、節（clause）を名詞化しTheme-Rheme構造の中の主題となすことができれば、これにコメントを加えながら説明をさらに展開させることができる。このような表現が文章中でどのような役割を果たすのかは各科目や教科によって異なるため、具体的な科目の文脈の中で文を分析することによって、各科目固有の表現の特徴を学び内容理解に結びつけることが可能になる。

おわりに

以上が、講義内容のまとめである。英語圏では、アカデミックイングリッシュの難しさと重要性を考慮して、大学においてはさまざまな機会を通し

てその重要性を説明したり、練習問題を提供したり、警告すらしているところもある。これに対して、日本ではこれまで話し言葉と書き言葉の相違について教えられることはあまりなかった。書き言葉の最たるものであるアカデミックイングリッシュを学習することの重要性についても認識されることがあまりなかった。しかし、インターネットの発達によって物理的にはさまざまな文書を容易に手に入れることができるようになった今こそ、その内容を理解するために日本人大学生はアカデミックイングリッシュを用いた読み書きを学ぶべきなのだ。筆者は、しばらく盗用について研究を行っていたが、盗用の多くは道徳心の問題ではなく適切な言いかえができないという語学問題であると考えている。では、なぜ適切な言いかえができないのかというと、アカデミックイングリッシュが用いられて意味の凝縮した英文から具体的な内容が取り出せないからだ。難解な英文を前にただ立ち尽くすのではなく何とかその英文と格闘する方法がないのか。筆者は、その一つの方法は接辞の学習による複雑な語彙の分析や文法メタファーの学習による内容の展開（unpacking）ではないかと考えている。

References

Biber, D. & Gray, B.（2010）. Nominalizing the verb phrase in academic science writing. In B. Aarts, J. Close, G. Leech, & S. Wallis（Eds.）*Verb phrase in English: Investigating recent language change with corpora*（pp. 99-132）, Cambridge, UK: Cambridge University Press.

Cameron, J.S.（2011）. *Comprehend to comprehension: Teaching nominalization to secondary ELD teachers*（MA Thesis, University of California, Davis）. Available from PQDT Open, Dissertation/ Thesis abstract. https://pqdtopen.proquest.com/doc/897922386.html?FMT=ABS

Cooper, J.（2010）. Nominalization. Academic English Online presented by Queen Mary University of London. Not available now. Retrieved from http://aeo.sllf.qmul.ac.uk/Files/Nominalization/Nom%20LOC.html

de Oliveira, L.C.（2010）. Nouns in history: Packaging information, expanding explana-

tions, and structuring reasoning. *The History Teacher, 43*（2）, 191-203.

Fang, Z., & Schleppegrell, M.J.（2010）. Disciplinary literacies across content areas: Supporting secondary reading through functional language analysis. *Journal of Adolescent & Adult Literacy, 53*（7）, 587-597.

Gillett, A.（2021）. *Features of academic writing: Using English for academic purposes for student in higher education.* Retrieved from http://www.uefap.com/index.htm

Halliday, M.A.K.（1989）. *Spoken and written language.* Oxford, UK: Oxford University Press.

Halliday, M.A.K.（2004）. *The language of science.* New York: Continuum.

Halliday, M.A.K. & Martin, J.R.（1993）. *Writing science: Literacy and discursive power*. New York; Routledge.

Hitchcock, R.（2010）. Grammar and academic style for EAP（English for academic purposes）. Retrieved from http://humbox.ac.uk/1526/

Rose, D. & Martin, J.R.（2012）. *Learning to write, reading to learn: Genre, knowledge, and pedagogy in the Sydney school.* Sheffield, UK: Equinox.

Schleppegrell, M.J.（2004）. *The language of schooling: A functional linguistics perspective*. New York: Routledge.

Unsworth, L.（1999）. Developing critical understanding of the specialized language of school science and history texts: A functional grammatical perspective. *Journal of Adolescent & Adult Literacy, 42*（7）, 508-521.